

60394

教科書文庫

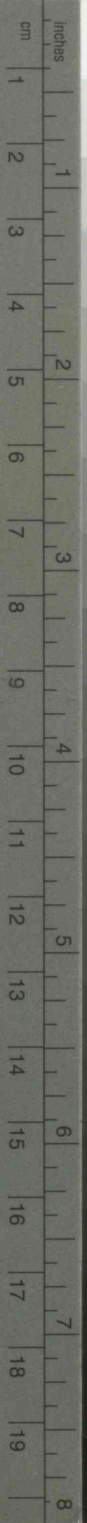
6
810
79-1949
20000 67140

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3a
810
册24

教科書

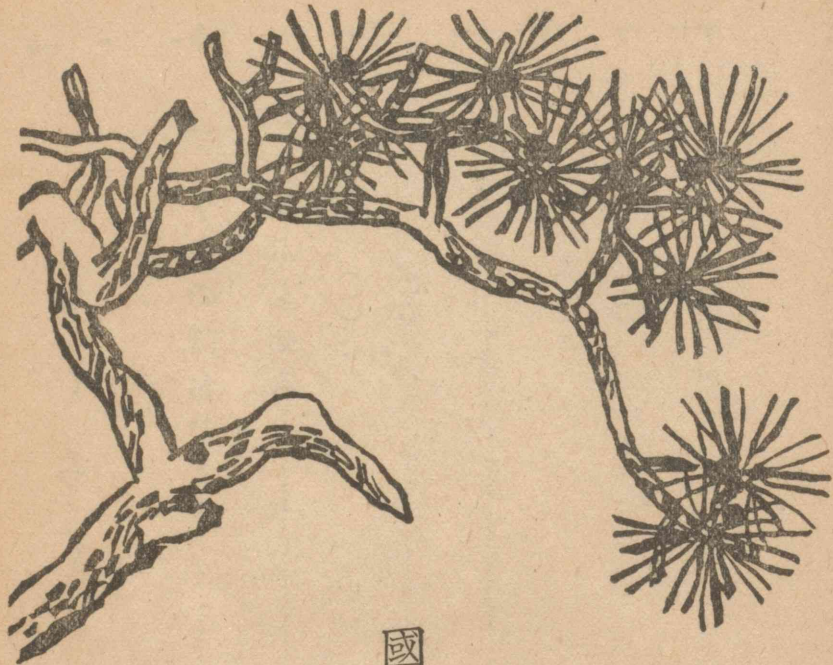
國語



第四学年 中



資料室



國語



第四学年
中

32

810

BB24

もくろく

一 うちのほおじろ……………四

二 あぶらぜみ……………十四

(一)

(二)

三 天の川……………二十六

(一)

(二)

四 幸福……………三十七



こがねひめ

一 まいのシャツ

幸福

五 みはらし台……………五十六

六 みにくいあひるの子……………六十

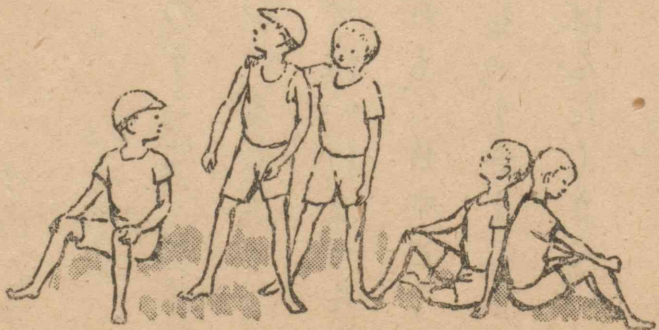
(一)

(二)

(三)

(四)

七 いねを育てて……………九十四



— うちのほおじろ



ちようど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ
という、うちじゅうの人気者がいました。

西洋の子どもだらうなどと、早がってんしてはいけません
よ。いぬでもねこでもありません。鳥——それも、日本どく
どくの、北はほっかいどうから、南はきゆうしゅうやそのさ
きの島々まで、いたるところの山野に、いちばんたくさんい
る鳥といわれるほおじろです。

どうして、ピオが私のうちにかわれるようになったかとい

えば……。

秋のはじめのあるばん、一家そろって、ぎんざの大通りを
歩いていましたら、あるデパートのまえのうすくらがり
大ぜい人が立っているの、なんだろうとのぞいてみると、
ひとりの小鳥屋が、夜店をひろげていました。

小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほうがいかもし
れません。なぜなら、ほおじろだけしか賣っていなかったの
ですから……。それがまたとくべつで、そばにすえた小さな
かごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせた
り、かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、口さきにふく
んだえさをとらせたり——そのめずらしさ、おもしろさに、

黒山の人だかりだったので。

私も、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買い、小さなボールばこに入れてもらって、だいに持って帰りました。そのばんから家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。

だんだんなれて、指さきへもかたへもどまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつつくようになりました。それどころか、自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、「ピオ」とよんでひぎをたたくと、ひぎの上にとび乗ったり、三どの食事には、テーブルの上でおしよばんしたりしました。

客がきているときなど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいまねをすると、

「これ。」

どしかったり、それでもきかなければ、指で追ったりしました。すると、だんだんあとずさりして、うしろに氣づかず、テーブルのはしからころげ落ちたりしました。

朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。まるで、一日の幸福を予言してくれるようです。思わずおきだして、

「ピオ、いい声だなあ、おまえは。」

とほめたり、なでてやったり、

「どこの生まれたい。」

と、きいてみたりするのです。

「どこ。」というのは、同じ日本の中でも、土地土地でほおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。たとえば、「いっぴつけいじょう」と歌ったり、「ツンツンつっころばし」とさえずったり——

それは、鳴きかたのちがいではなく、ききかたのちがいだろうと思う人もありましようが、そればかりでなく、ほおじろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。なんどりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だろうと、それを知ってから、よけいにピオがすきになりました。

ピオのほうでも、その氣になったらしく、ときたまそどろじへだしてやっても、すぐまいもどってきます。ろじどころか、庭の木にとまらせても長くはいません。私たちの家のうち、中でも茶のまほど、すきな、安心なところはないうように——庭さきにいるとき、とつぜん、上へ飛行機でもとんでくると、そのあわてかたといったらありません。びっくりして茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひぎのあいだにもぐったり頭をつっこんだりします。

といえは、いかにもおくびょうもののようにも思えましようが、どうして、一方では、とてもむてっぽうなきかんぼうでした。たとえば、近所のねこやのらねこが通りかかっても、

にげるどころか、向かっていこうとさえするのです。うちの
中にいるかぎり、こわいもの知らずで、なにか氣にいらなかつ
たりおこったりすると、赤い口をあけて、私たちをおどした
りかんだりします。そのかっこうは、さるそっくりです。ま
た、どうかすると、歩いているとき、追いかけてきて、かか
とや足の指をつついたりするのです。

ピオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃめぶりや、おかし
さなどは、まだいくら書いても書ききれません。小さな家で、
小さなかつこうをしていながら、毎日なにかかわったことを
してかしては、みんなをおどろかせたり感心させたりします。

ところが、ある土曜の午後、おなかをすかして学校から帰っ
てきたすえの女の子が、茶のまのドアをあけて、ひよいとぶ
みこんだたん、うちがわでむじゃきに遊んでいたピオを、
かた足でふんでしまったのです。

「あっ。」

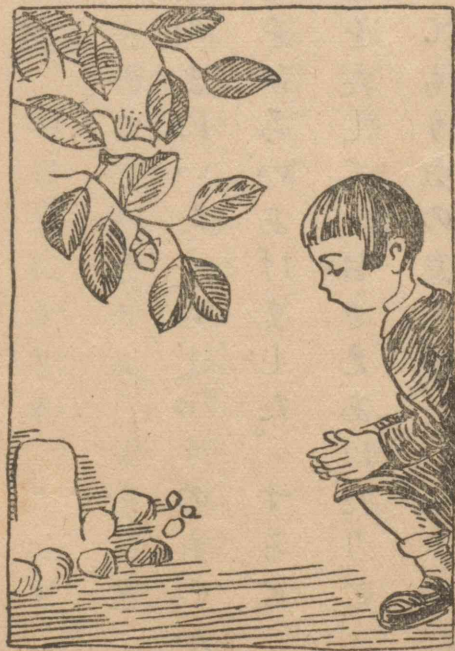
と、女の子ばかりでなく、茶のまにいたうちじゅうのものが
びっくりして、いそいでピオをひろいあげました。すると、
あわれにも、くちばしから血をだして、目さえあけたりとじ
たりして、からだをふるわせてもう虫の息です。

「ピオや、ピオちゃん。」

みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすり
をのませるやら、あたためるやら——あらゆる手あてをつく

しましたが、それなり、まもなく息をひきとりました。

みんなないて——ことに、すえの女の子などは、目をなきはらしましたが、もうどうすることもできませんから、つめたくなつたからだをわたにつつんで、小ばこに入れて、庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。そうして、「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立ててやりました。



かわいいものをなくしたばかりでなく、私は、ピオの信ら

いをうらぎつたのが、かなしくてなりませんでした。ころしたのは、もちろんあやまちですが、でも、信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさは、いいようのないものでした。

それから十年、いまでも、私はピオのことがわすれられませんが、ことに、町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、「チロリン」だの、「チイチイチン」だのと鳴いているほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずなみだぐみます。

たかが一わの小鳥のことをと、わらわないでください。この思いでは、おそらく一生なくならないでしょう。

二 あぶらぜみ

(一)

夏の終りに、庭のまつの木のかれえだの皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

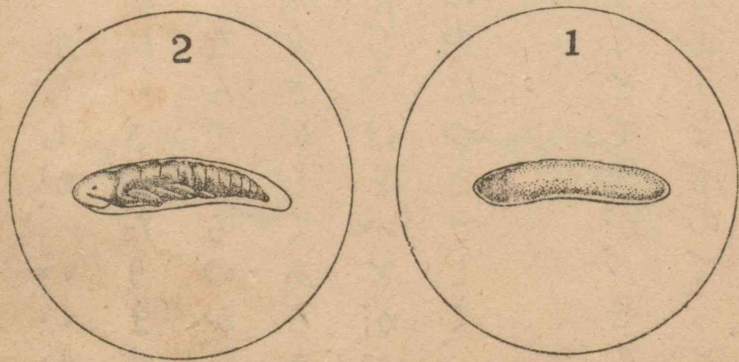
親ぜみのはらのさきにあるほそくどがったくだのさきで、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、寒い冬もぶじにこすことができました。

春がきても、たまごはそのままでした。暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。二ミリほどある、白いうじのようなうちゅうが、はいたして、まつふとい

みきをつたって、地面に向かって、すべったりころがったりしておりていきました。

地面におりた虫たちは、やがて、思いいかにやわらかいところをさがして、地の中にかくれてしまいました。

地の中はどこもまっくらです。せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足でトンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐっていきます。そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、

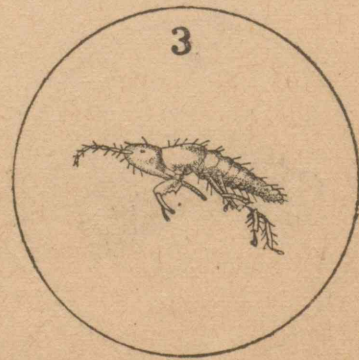
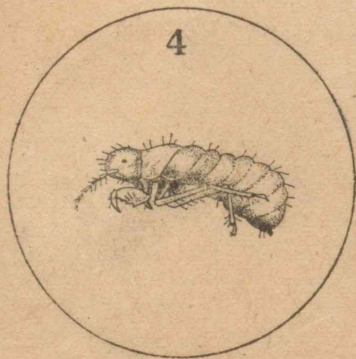


かさなりあってはえています。まつの木の根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいっても、なにかの木の根にいきあたります。しかし、虫たちは、において知るのか、なんて知るのか、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいどがった口をもっています。その口のさきを根の中につきさして、木のしるをすいはじめます。

これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったようなもので、とりついたがさいご、よいいにそれからなれません。

虫たちは、どうしてこんなことがで
きるのでしょうか。それは、だれも教え
てくれたことではありません。人間の
あかんぼが、したのさきをじょうずに
つかってちちをのむのと同じように、
しぜんになわったかしこさで、これ
でじょうずに生きていくのです。

虫は、はじめは、白い、よわよわし
いうじのようなかたちをしています。が、
大きくなるにつれて、六本の足がだん
だん強くなり、ことにまえ足は、いつ



もトンネルをほるのにつかいますから、たいへんかたく、じょうぶになります。

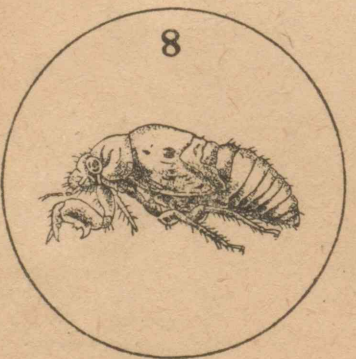
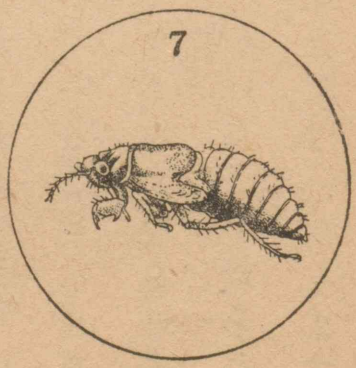
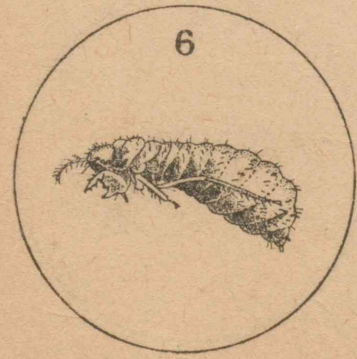
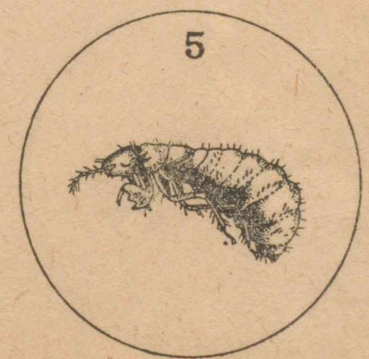
土の中は、たとえば一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。それでたいそうほねがおれて、このうえなくふべんですが、そのかわり、親たちの大てきのすずめなどもやってこないのが、安全です。

同じ地中に住むものでも、こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、つみごえやこえ土の中に生みつけられて、

一二年で大きくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

しかし、ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつすっているせみの子たちは、たいへん生長がおそくて、ように大きくなりません。あぶらぜみでは、七年もかからないと、親になることができないといえます。なんとという氣長なことでしょう。

せみの子たちは、はじめにはあさいところにおいて、ほそい木の根のしるを



すっています。大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。

七年の月日がたったころ、せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大きくなりきったことを知ります。そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。

上からつたわってくるあたたかさど、かわきかたどで、いまが夏だということや、よい天気がつづいていることなどを知ります。せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、あたりのくらくなりかけた夕ぐれをみはからって、思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

(二)

あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、ほんとうにおかしなものです。皮がこわばっていて不自由だし、目もよくはみえないらしいので、ひきがえるなどにみつけられたらたいへんです。

地上には、一本のくわの木がはえていました。せみは、さっそく、ぶさいくなかつこうをして、それにはいあがっていききました。地表から一メートルほどのぼったところに、小えだがかかれていました。

虫は、それにとりつくど、足のつめでかたくそれにしがみ

ついて、動かなくなっていました。

もうすっかりぐらくなりました。あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、われめがてきました。すると、中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだが見だしてきました。せなかがでます。頭がでます。はねがぶらりとさがりました。足もでました。ただ、はらの下のほうだけが皮にかくれています。



虫はぐっとそり返るようになって、頭をうしろにさげました。しばらくそのままのしせいで動きません。やがておきなをおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

みるまに、はねはすらりと、のび、からだの色もこくなくなていきます。

虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。



朝日が山の上ののぼって、明かるい光がさつとさすころになると、せみのはねは、ぶるぶるとふるえて、色も、もよりも、はっきりとしています。黒いところは黒く、茶色のところは茶色になって、いかにもあぶらせみらしくなります。

しばらくすると、れいのまつの木でも、ほかのあぶらせみが「ジージー、ジージー」と鳴きはじめました。このわかあぶらせみは、きゆうに元気になって、そろそろと歩きたしました。はばたきをして、すつととびたつたかと思うと、その鳴いているなかまのそばへ、とんでいってとまりました。

そこへなかまが集まってきて、にぎやかな音楽会のようになりました。

やがて死ぬけしきはみえずせみの声

と、むかしの人がうたっています。そのとおり、死ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きたたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまって、あたりもひっそりとしずかになります。

せみの死がいは、ありたちがよってたかってひいていきますが、あのぬけがらだけは、いつまでもえだのさきにかたすがりついています。

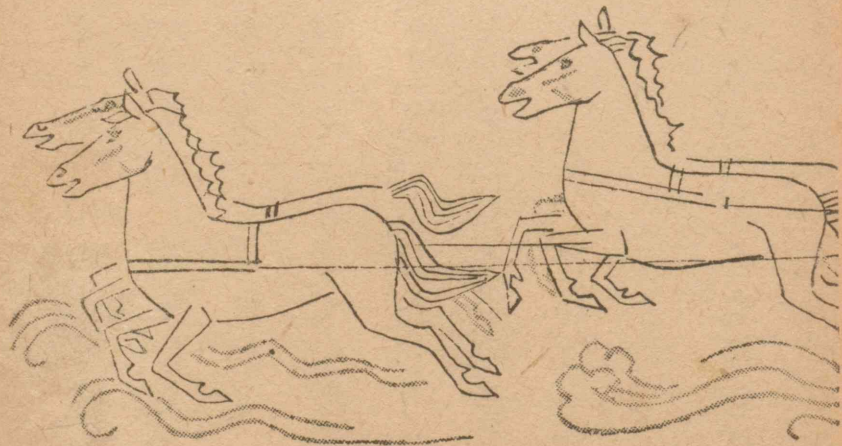
三 天の川

(一)

たまでかぎった、きれいな
四頭びきの馬車が走ってきま
す。中には天帝てんていが乗っておい
てです。

馬車は、七色の大きなそり
橋を音もなくわたって、草花
のさきみちている野原へおり
てきました。

そこには、星のかんむりを
つけたむすめたちが、楽しげ
に歌ったり、花つみをしたり
して遊んでいました。天帝は、
あたりをみまわして、なにか
さがすようになさいました。
それは、天帝のひとりむすめ
のはたおりひめのすがたを、
もとめておいでになるのでし
た。けれども、みあたりませ
んでした。馬車はふたたび走



りだして、草原をよこぎって行ってしまいました。

やがて、大きな天の川にさしかかりました。川の水は銀色に光り、はくちょうがしずかにういていました。川岸にそって車を走らせていくと、林の中にごてんがあつて、中からはたをおる音がひびいてきます。天帝は、そつとごてんの中へおはいりになりました。すると、さがしていたはたおりひめが、いっしんにはたをおっていました。そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。ひめは、なにも知らずにおりつつけました。

「ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、うちのむすめは、こうしてはたらきつつけているのは感心なことだ。

むすめのために、りっぱなむこをさがしてやろう。」

こうお考えになった天帝は、そのままそとへでて、また馬車を走らせて、天の川の東の岸を通っていらっしゃいました。すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。そのすがたといい、その目といい、ふえの音といい、申しぶんのないけだかさがこもっています。

「あなたの名はなんといいますか。」

天帝は、その男にたずねました。

「私は、けんぎゅうというものです。」

「けんぎゅうというのですか。」

「はい。」

天帝は、ひとつこの男のう
 でをためしてみようと考えて、
 黒うしのしっぽのあたりを一
 つきおつきになりました。黒
 うしは、おどろいて、大あば
 れにあげだしました。けれ
 ども、けんぎゅうはおちついて、
 ふえをふきつつけていまし
 た。黒うしは、にわかにかけたし、
 天の川へ落ちこもうとし
 ましたが、そのせつな、けんぎゅう
 は、うしの首をかるくポ
 ンポンとたたきました。うしは、
 うまくふみとどまって、お
 どなく草をたべはじめました。
 けんぎゅうは、やはりふえ



に心をうばわれていました。
 天帝は、男らしいうでまえ
 にうたれて、むすめのむこに
 もらいました。
 ところが、はたおりひめは、
 あまりうれしので、はたを
 おることをわすれてしまいま
 した。けんぎゅうも、はたけ
 にでてはたらかなくなりまし
 た。ふたりは、毎日野原で樂
 しく遊びつつけました。

それをみた天帝は、たいへんおおこりになって、はたおりひめを天の川の西の岸のごてんにもどしてしまい、けんぎゅうを東の岸に帰しておしまいになりました。

はたおりひめは、毎日たをおりながらなきました。

天帝は、このようすをごらんになって、

「では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。」

とおっしゃいました。

一年の月日がたって、いよいよその日になると、けんぎゅう

は、黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

ふたりは、天の川で楽しくあうことができました。

(二)



天の川は、なん千なん万という星がかさなりあって、あのように、ぼうっとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。

この星は、一つ一つがはっきりとみえないのですから、ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。

私たちの、ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきよりは、おしはかることはできません。

ふだん、私たちは、メートルという単位を用いてきよりを計りますが、星のきよりになりますと、これでは、もうまに

あいません。そこで、もっと大きな単位をもとにして計ります。

それは、「光年」という単位です。一光年は、光が出発してから、一年かかってとどくきよりをさしていいいます。光の速度は、一秒間に地球を七まわり半します。この早さで計算しますと、太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ばかりかかることになります。

ところが、光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。五日や二十日でもありません。五か月や八か月でもありません。「光年」を単位として計算しなければならぬほど、遠いきよりであります。

さて、空の星は、地球からのくらのきよりにあるのてしよ。



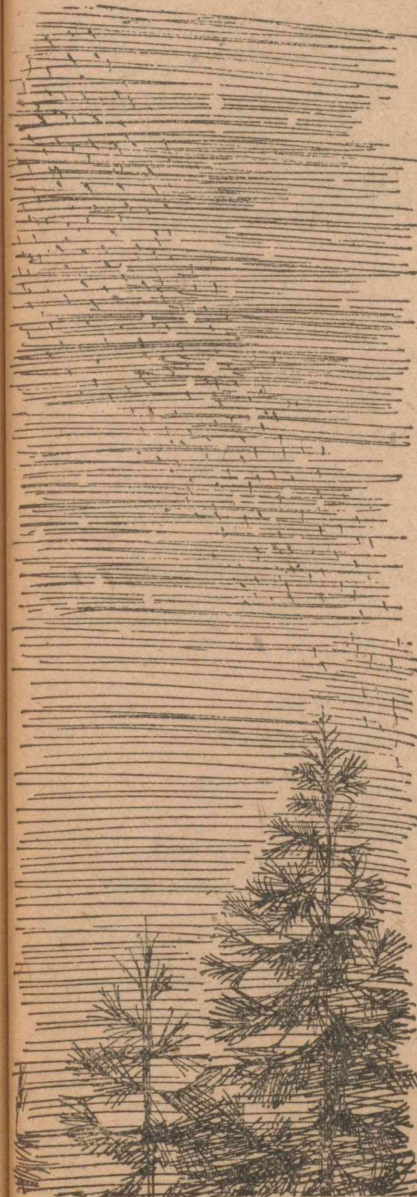
二十光年の星もあり、三十光年の星もあります。あのたなばたものがたりのはたおり星は、二十七光年ですから、今夜のはたおり星の光は二十七年ほどまえに発した光だというわけになります。

このほか、五十光年のところに光っている星があります。百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、一万光年の星もあります。それどころか、十万光年の星もちらばっています。

夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運
行しているということですよ。

このきそく正しいちつじよは、いったいどうしてたもたれ
ているのでしょう。



四 幸福

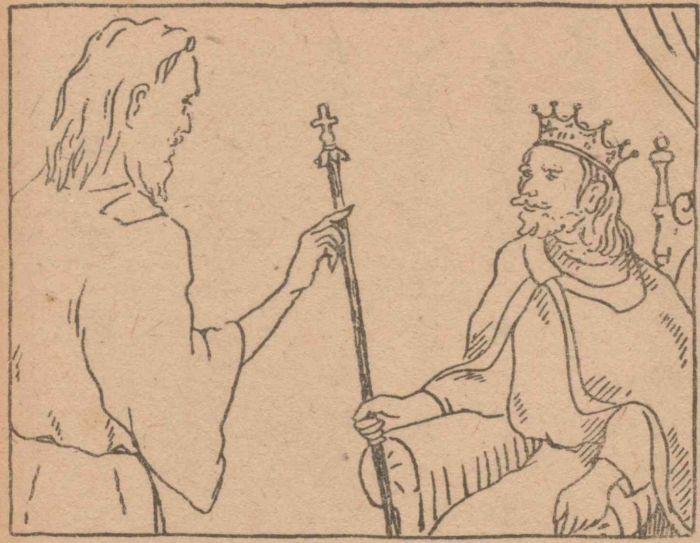
こがねひめ

あるところに、金持の王さまがいらっしやいました。かわ
いひどりの王女もあって、なにひとつ不足なことはありません
せんでしたが、もっとたくさんこがねを集めようと願ってお
いでになりました。

王女がこがね色のたんぽぽをつんでくると、王さまは、

「この花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが、
とおっしやいました。」

ある日、王さまは、たからぐらの中で、たから物をかぞえておいでになると、み知らぬ人がはいつてきました。



「王さま、あなたはお金持ですね。」

と、そのみ知らぬ人がいいました。

「すこしはある。けれども、まだじゅうぶんではない。」

と、お答えになりました。

「まだ満足ではないというのですか。」

「そのとおり。」

「どうすれば満足なさるのですか。」

「わたしの手にさわったものが、みんなこがねになったら。」

「そうですか。たしかにそうですか。」

「自分は、それ以上の幸福は願わない。」

「では、その願いどおりにしてあげましょう。」

「ほんとうか。」

「あすの朝から、たしかにそのようになるでしょう。」

み知らぬ人は、そのままどこかへ行ってしまいました。

あくる朝になりました。王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。いすはたち

まちこがねにかわりました。

王さまは、ねどこにおさわりになりました。それもこがねになりました。着物を着ようとなさいました。着物もこがねになりました。

王さまは、庭へおでになりました。

「さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。」

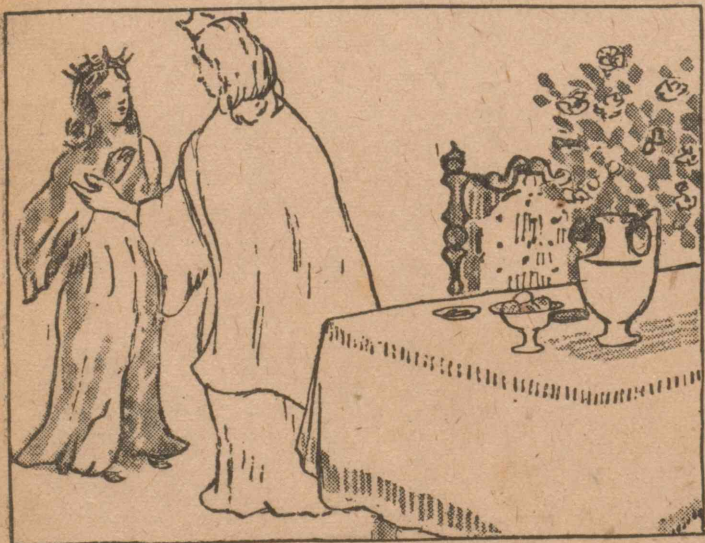
こんなひとりごとをおっしゃって、そらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと光ったこがねになっていきました。

王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさいました。まず

コーヒーをおのみになろうとすると、コーヒーはこがねにかわりました。さかなをめしあがろうとなさると、これもこがねのさかなになりました。たまごをおどりになりました。これもこがねのたまごになりました。そのとき、王女がはいつてきました。

「おとうさま、おはようございます。」

こういって、王さまにだきつきました。



「おお、かわいいひめや。」

とおっしゃいましたが、王女はなんの返事もしません。王女は、かたいこがねになっていたのです。

王さまは、おかしみになりました。王女は、王さまにとつては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。「こまつたことになってしまった。もし、ひめが生き返るなら、わたしはもうこがねなどはいらない。」

そうおっしゃつて、おくやみになっていらつしゃると、きのうの、み知らぬ人があらわれました。

「王さま、満足なさいましたか。」

「いや、いや、わたしは、こんなかなしいことはありません。」

「あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。」

「一ぱいの水です。」

「こがねと一きれのパンとでは。」

「一きれのパンです。」

「こがねと王女は。」

「ああ、かわいいひめです。」

「では、庭のいけの水をすくつて、こがねになつたものにつりかけなさい。きつともどおりになるでしょう。」

王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつて、王女からだにおふりかけになりました。

「おとうさま。」

王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

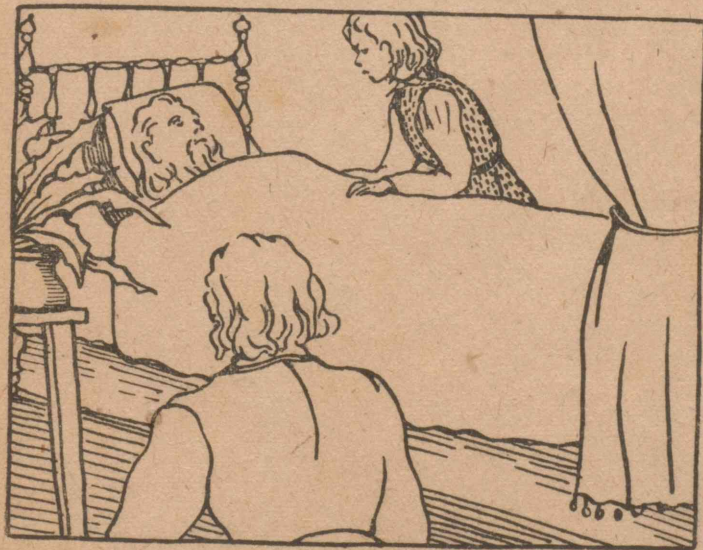
一まいのシャツ

あるところに、ひとりの王さまがいらっしやいました。

王さまは、ご病氣をなさって、長いことお苦しみになりましたが、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。

王さまは、

「わたしの病氣をなおしてくれ



たものには、國の半分をわけてやる。」

というおふれを、おだしになりました。

これをきいて、ちえのある人たちは、みんなより集まって、どうしたら王さまのご病氣をなおすことができるかと、相談をはじめました。けれども、これという考えはでませんでした。そこへ、王さまの病氣をなおすというものがでてきました。その人は、こういいました。

「ほんとうに幸福な人を見つけ、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。そうすればすぐおなおりになります。」

これをきいて、王さまはたいへんお喜びになりました。さっ

そくけらいたちを集めて、

「そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。そうして、そのシャツをもらってくるように。」
と、おいいつけになりました。

けらいたちは、あちこちとさがしまわりましたが、ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかれるものではありません。金持だと思ふことからだがよわかったり、からだがじょうぶだと思ふがたりなかったり、金もあり、からだもりっぱで、なんの不自由もなくくらししているかと思うと、友だちがいなかったりしました。

けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりましたが、やはりみあたりませんでした。

王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

どんどん歩いていくと、さびしい村にさしかかりました。日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。

ところが、そまつな一けん的小屋がありました。その小屋のそばを通りかかったときでした。中から人の声がきこえてきます。

王子はふと立ちどまって、その声に耳をかたむけました。
「ああ、せいっぱいはたらいて、ばんごはんもいたいた。

あとはぐっすりねるばかりだ。ありがたい、ありがたい。世の中にわたしより幸福なものはあるまい。ほんとうにわたしは幸福ものだ。

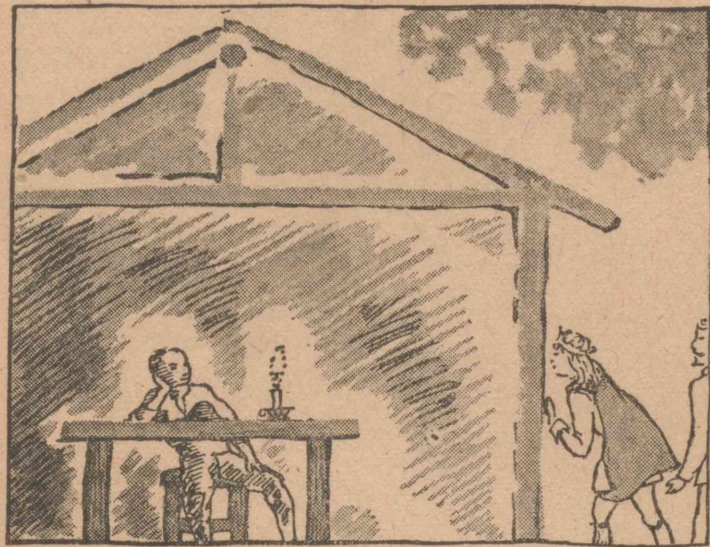
王子は手をうって、

「この人こそ、さがしもとめていた人だ。」

と喜んで、つかつかと小屋の中へはいつていきました。

中には、うすぐらいひが一つともっているだけでした。

ひとりの男が、いまにもごろ



りと横になろうとしているところでした。王子は、いままでのわけをこの男に話しました。

すると、その男は、

「王さまに、さしあげたいことはやまやまですが、わたしに

は、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。」

と答えました。

幸福

「幸福」が、いろいろな家へたずねていきました。

だれでも幸福のほしくない人はありませんから、どこの家をたずねても、みんな喜んでむかえてくれるにちがいありません。

せん。

けれども、それでは人の心がよくわかりません。そこで、「幸福」は、まずしいこじきのようななりをしました。だれかがきいたら、自分は「幸福」だといわずに、「びんぼう」だというつもりでした。

そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくわかえてくれる人があったら、その人のところへ幸福をわけておいてくるつもりでした。

この「幸福」が、いろいろな家をたずねていきますと、いぬのかつてある家がありました。その家のまえにいて、「幸福」が立ちました。

その家の人は、「幸福」がきたとは知りませんから、まずしいこじきのようなものが家のまえにいるのを見て、

「おまえさんはだれですか。」

とたずねました。

「わたしは、「びんぼう」でございます。」

「ああ、「びんぼう」か、「びんぼう」はうちじゃおことわりだ。」

と、その家の人は、戸をピシャンとしめてしまいました。おまけに、その家にかつてあるいぬが、おそろしい声で追いたてるように鳴きました。

「幸福」は、さっそくごめんをこうむりました。

こんどは、にわたりのいる家のまえへ行って立ちました。

その家の人も、「幸福」がきたとは知らなかったとみえて、いやなものでも家のまえに立ったように顔をしかめて、

「おまえさんはだれですか。」

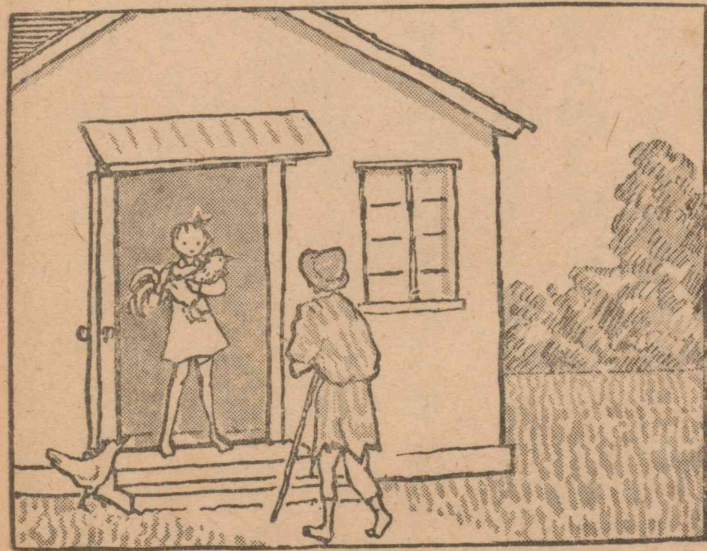
とたずねました。

「わたしは、『びんぼう』でございます。」

「ああ、『びんぼう』か、『びんぼう』はうちじゃたくさんだ。」

と、その家の人はふかいたため息をつきました。

それから、かつてあるにわと



りに氣をつけました。まずしいこじきのようなものがきて、にわとりをぬすんでいきはしないかと思ったのでしよう。

「コッ、コッ、コッ。」

と、その家のにわとりは、用心ぶかい声をだして鳴きました。

「幸福」はまた、その家でもごめんをこうむりました。

こんどは、うさぎのかつてある家のまえへいって立ちました。

「おまえさんはだれですか。」

「わたしは、『びんぼう』でございます。」

「ああ、『びんぼう』か。」

と、いいましたが、その家の人がでてみると、まずしいこじ

きのようなものが、おもてに立っ
ていました。その家の人も「幸
福」がきたとは知らないようでし
たが、なさけのある人とみえて、
台所の方からおむすびを一つに
ぎってきて、

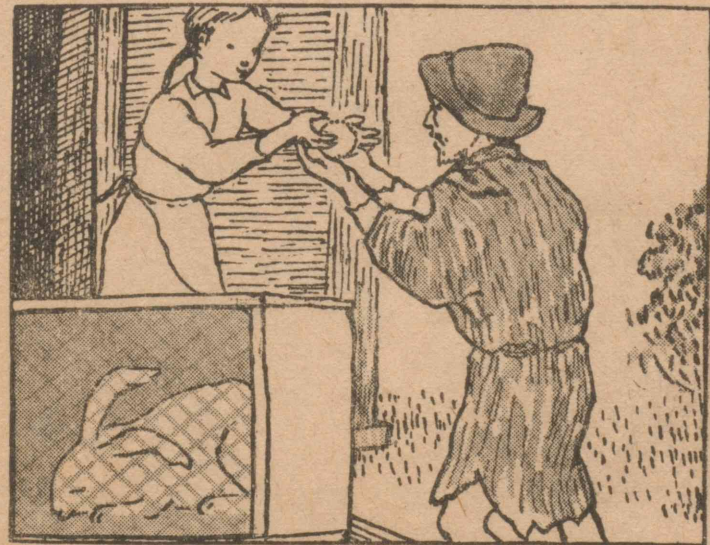
「さあ、これをおあがり。」
と、いってくれました。黄色なた
くあんまで、そのおむすびにそ
えてくれました。

「グウ、グウ、グウ、グウ。」

と、うさぎは、高いびきをかいて、さも楽しそうに晝ねをし
ていました。

「幸福」には、その家の人の心がよくわかりました。おむす
び一つ、たくあん一きれにも、人の心のおくは知れるもので
す。

それをうれしく思って、その家へ、幸福をわけておいてい
きました。



五 みはらし台



朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、
美しいすな地がみわたされた。

ぼくは、すな地の上にまっすぐな足あとをつけてみようと思っ
て歩きだした。すこし歩いてからふり返ってみると、足あと
が曲がっている。

そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして歩きだし
た。まえのよりはまっすぐだが、波うちぎわのかもめが目に
ついて、それに氣をとられて、わきみをしたあたりが横にそ
れている。

こんどは三どめだ。しっかり目あてをみさだめて歩いてみ
よう。

五百メートルほどさきに、ひきあげてある小船がある。よ
し、あれを目じるしにしてやってみよう。小船にいきついて、
それにもたれて、いま歩いてきた足あとをみると、みちがえ
るように、まっすぐな、しっかりした足あとがついている。
ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話をしたら、おじ
いさんは、

それはおもしろい。勉強もそのとおりだ。
とおっしゃった。

ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。いままでのぼってきた方をふり返ってみると、足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。すると、おもちゃのように小さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。みんな手をあげて、「ウアッ。」と、汽車によびかけた。先生は、

「さあ、もう一曲がりだ。みんなその元氣でのぼろう。」とおっしゃって、さきに立ってお歩きになった。

みはらし台に立ってみると、目のまえに高い山々がそびえて、ずっとつづいている。下をみると、大きな川が遠くへ流れている。

ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

あの山にのぼったら、もっと大きなけしきがみえるだろう。山の上には、青い空がすきとおるようにすんでいる。

飛行機の上からは、もっともっと大きなけしきがみえるだろうと思った。

そのことを先生に話してみたら、先生は、「そうだ。高いところにのぼるほど、大きな世界がみえる。」とおっしゃった。

六 みにくいあひるの子

(一)

いなかには、いいお天気であった。麦ばたけは黄色く、からすむぎはみどりであった。野原にはかれ草がつみあげられ、ここのとりは、長い赤い足をして歩きまわっていた。

田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いまみずうみがあった。

みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。それは、たまごをかえしているのであった。けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。それに、たずねてくれるものも少ないし、ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであったからである。

とうとう、一つ一つたまごがわれた。「ピヨ、ピヨ」と、どのたまごからも小さなひなの首がでた。「ガア、ガア」と親あひるがいうと、ひなたちはすぐとびだしてきた。そうして、みどりの葉の下で、あたりをみまわした。

みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。

「世界は広いものだなあ。」
と、ひなたちはいった。

「これが世界だと思っているのかい。世界は庭の向こうがわまで広がっているのだよ。さあ、みんなそろったろうね。」
と、いいながら、親あひるは立ちあがった。

「いや、みんなではない。いちばん大きなたまごがまだのこっている。いつまでかかるのだらう。わたしは、もうほんとうにくたびれた。」

と、ひとりごとをいって、こしをおろした。

「どうだね、どんなふうだね。」

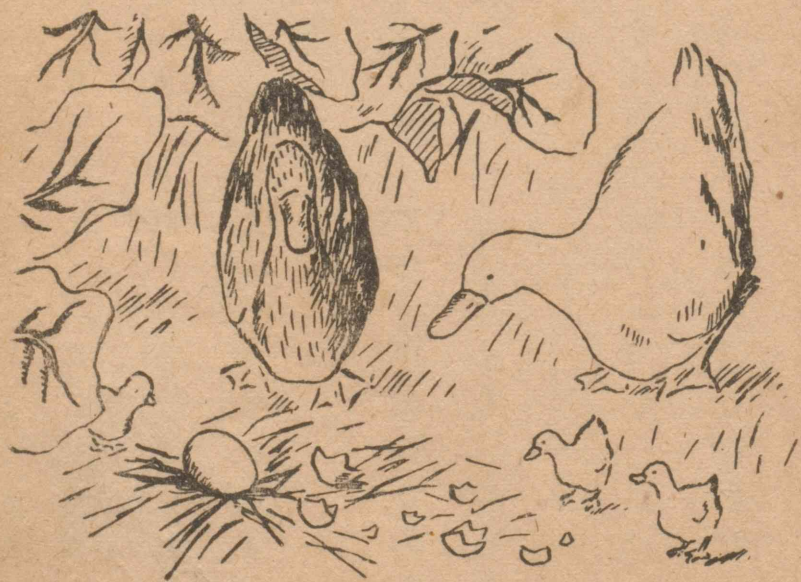
と、たずねてきた年よりのあひるがいった。

「一つのたまごに長くかかるのですよ。なかなかわれないの
でね。」

「われないというたまごは
どれかね。」

と、年よりのお客さんがいっ
た。

「きつとしちめんちょうの
たまごだよ。わたしも、
一どそれでたまされたこ
とがあつてね、そのひな
には苦勞したよ。なにし
る、水をこわがるのだから、
どんなにしても思ひ



きってはいるようにしてやることができなかつた。わたしは、「グワツ、クワツ。」と鳴いたり、「コツ、コツ。」といったりして教えたのだが、だめだった。どれ、たまごをみせてごらん。ははあ、そうだ、そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およぐことを教えてやるがいいよ。でも、もうすこしだいてみましょう。いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。」
「それでは、ごかつてに。」

年よりのあひるは、そういって、どこかへ行ってしまった。それから二三日して、どうどうその大きなたまごがわれた。
「ピイヨ。ピイヨ。」

と、ひなは鳴いて、はってでた。それは、ひどく大きなからただ、たいへんみにくいものであつた。

親あひるは、じつとその子をながめた。

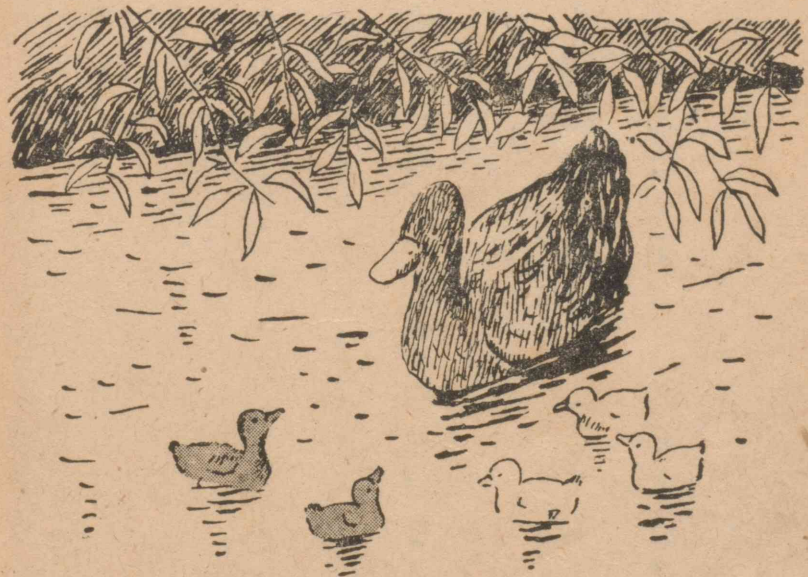
「これはまた、ひどく大きなひなだ。ほかのものは、一わだつてこんなすがたをしていない。ほんとうにしちめんちやうのひなかしら。なにしろ、水に入れてやらなければなるまい。」

あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼうの上をてらしていた。親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。さつと水の中へとびこんだ。

「グワツ、クワツ。」というど、ひなたちも一わずつとびこんだ。

水はひなたたちの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。みにくいあひるの子も、いっしょになっておよいだ。「いや、しちめんちようではない。」

と、親あひるはいった。「あのうまく足をつかうよ、うすや、あのしせいはいのをみてもわかる。こ



れはわたしの子だ。よくみればきれいな子なのだ。『クワツ、クワツ。』わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。だが、わたしのそばにくっついてね。人にふまれないように、それからねここに氣をつけてね。」

そこで、みんなは鳥小屋にでかけた。そこには、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであらそっていた。そうして、親あひるにつれられたひなたたちが通っていくと、一わの鳥が、

「あれをみるがいい。あそこにいるあひるの子をさ。なんというかっこうだろう。」

というど、もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。

「ほっておいてください。だれにもわるいことをしないのですから。」

と、親あひるがいった。

「あんまり大きすぎてみっともないから、かみつきたくなるんだよ。」

年よりのあひるは、

「あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。あれだけはしくじったね。」

といった。すると親あひるは、

「あれは美しくはありませんが、たちはほんとうにいいんです。それに、ほかのものと同じようにおよぐし、いや、ほかのものよりうまくおよぐといつてもいい。大きくなれば美しくもなるでしょう。たまごの中にあんまり長くいたので、あんなふうになっただけですよ。」



どいつてかばった。

みにくいあひるの子は、あひるのなかまからわる口をいわれるばかりでなく、にわとりからもぶたれたり、つつつかれたりした。しちめんちょうは、風を受けた船のほのようにからだをふくらませて向かってきた。「ガア、ガア。」どいつて、顔をまっかにしてやってきた。

あわれなあひるの子は、立っていたほうがいいか、歩いていたほうがいいのかさえも、わからなかった。すがたがみつともないばかりに、みんなからしかりとばされるので、しみじみとなさげなく思った。

(三)

それからのちは、わるくなるばかりであった。おしまいは、自分の兄や姉からまで、

「おまえなんかは、ねこにくわれてしまえばいい。」

といわれた。親あひるですら、

「遠いところにいてくれさえすればいい。」

どいつた。あひるにはかみつかれ、にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

そこで、みにくいあひるの子は、かきねをとびこえてにげだした。すると、草むらにいた小鳥がおそれとびたった。

「これも自分がみにくいばかりに——」

と、あひるの子は思った。そうして、目をふさいだが、またさきへとんでいった。

こうして、大きなぬまのあるところへやってきた。そこにはかもが住んでいた。あひるの子は、ここでひとばん横になった。つかれて、気がしずんでいた。

朝がた、かもがとびおきた。そうして、新しいなかまをみた。「おまえさん、おまえさんはずいぶんみにくいね。」

と、かもがいった。

あひるの子は、このあしの中で、横になって休みたいと思った。また、ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。

それから二日間、ここにそっとかくれていた。すると、そこへ二わのがんがやってきた。どちらもたまごからはいだしてまもないものであった。

「おい、きみ。」

と、その一わがいった。

「きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。どうだ、われわれといっしょにでかけて、わたり鳥になる考えはないかね。きみはみっともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。」

このときである。「ボン、ボン。」と、空で鳴った。そうして二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。「ボン、ボン。」と、

また鳴った。がんのむれが、そろってあしのあいだからとび
たった。また音がひびいた。ものすごい鳥うちがはじまった
のである。

かりうどは、ぬまのまわりにまちぶせをしていた。あしの
上に広がっている木のえだにもものぼっていた。青いけむりが、
くらい木のあいだから雲のようにたちのぼった。

かりいぬが、ピシャ、ピシャとぬま地へはいつてきた。

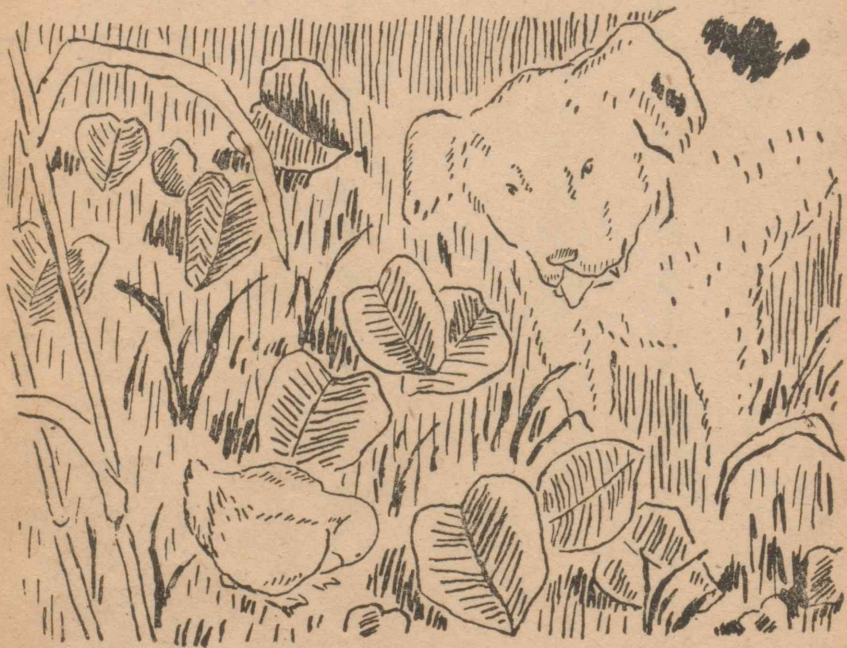
あわれなあひるの子はきもをつぶした。頭をねじ曲げてつ
ばさの中にいれた。ところが、ちょうどそのとき、おそろし
い大きないぬがそのすぐそばに立っていた。したは口からた
れて、目はみにくく光っていた。はなをあひるの子のそばに

つきつけて齒をむいた。そ
れからピシャ、ピシャと、
どこかへいつてしまった。

「ああ、ありがたい。」

あひるの子は、ため息を
ついた。

「自分がみにくいので、い
ぬもかみつこうとしない。
しばらく、じっとしずか
にしていた。そのあいだも
たまの音はあしのあいだに



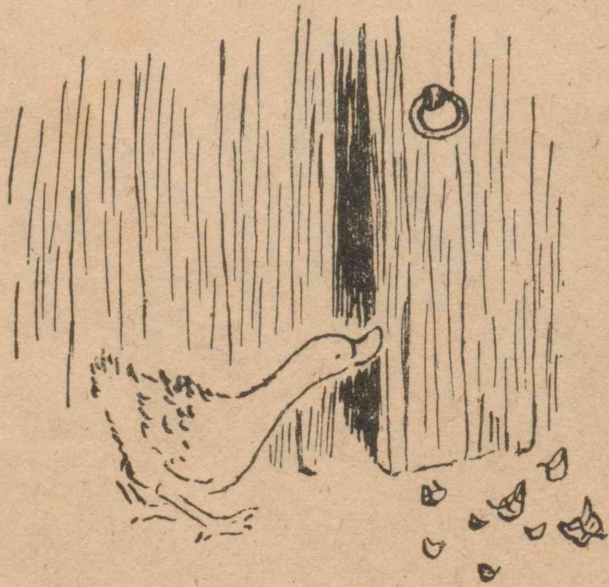
鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。
しばらくして、やっどひっそりした。しかし、かわいそう
にあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。なん時間
もたってから、ようやくあたりをみまわし、それから、でき
るだけ早くぬま地をにげていった。田や野原をこえて、どん
どん走っていった。

(三)

くれがたになって、あひるの子は、ある小さなひゃくしよ
うの小屋へやってきた。小屋はひどくあれていて、どっちに
たおれるかわからなかった。風がひどいので、あひるの子は

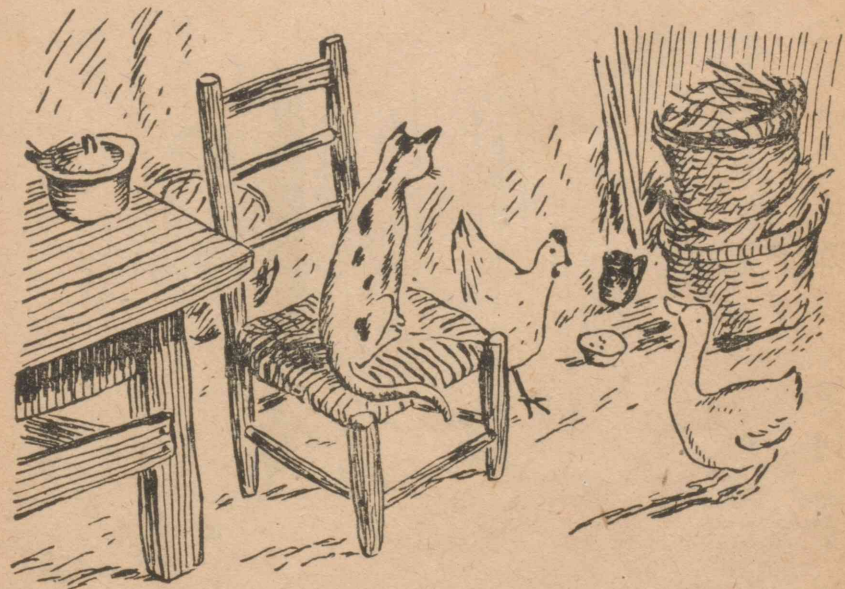
立つこともできず、すわりこ
んでしまわなければならなかつ
た。あらしはますますはげし
くなってきた。あひるの子は、
小屋の入口の戸がすこしあい
ているのをみつけたので、そ
こから中へはいつていった。

中には、おばあさんが、ね
こやにわとりといっしょに住
んでいた。ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らした
り、火花をだすことさえできた。にわとりは、足はみじかい



が、いいたまごをうんだ。
おばあさんは、それを自分
の子のようにかわいがった。
朝になって、よそからき
たあひるの子は、すぐにみ
つけられた。ねこはのどを
鳴らし、にわとりは「コッ、
コッ。」とさわいだ。

「これは、たいしたもうけ
ものだよ。これからはあ
ひるのたまごもたべられ



る。おすでなければいいが、まあ、かっしておいてみよう。」
と、おばあさんがいった。

そこで、あひるの子は、三週間ばかりためしにおいてもらっ
た。しかし、たまごはうまなかつた。そればかりでなく、ね
こやにわとりとはまったくちがった考えをもっていた。
にわとりは、

「おまえさんは、たまごをうむことができるかい。
と、あひるの子にたずねる。

「いいえ。」

「じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。」
すると、ねこがいう。

「おまえさん、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができるとかい。」
「いいえ。」

「それなら、かしこいものたちがものをいっているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。」

それで、あひるの子は、すみっこにすわってばかりいた。そこへ、さわやかな空気と日の光が流れてきた。あひるの子は、きゅうにおよぎたくなったので、にわとりに思わずその話をした。

「おまえさん、なにを考えているの。」
と、にわとりがさげんだ。

「おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。のどを鳴らすか、たまごをうみなさい。そうすれば、そんなことは考えなくなってしまふよ。」

「でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。それに、水の中へもぐってそこへいくと、それはさっぱりしますよ。」
「おまえさん、氣がくるったのだよ。ねこにきいてごらん。水の上をおよいだり、もぐったりするのがいい氣持かどうか。それから、うちのおばあさんにきいてごらん。世界じゅうで、あの人ほどりこうな人はありはしないから。」
「あなたは、私のいっていることがおわかりにならないのです。」

「おまえさんのいうことがわからないって。じゃあ、だれにわかるのかね。わたしのことはいわないとしても、おまえさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは思っていないだろうね。うぬぼれてはいけないよ。人がしんせつにしてあげるときは、喜ぶものですよ。あたたかなへやにはいってさ、ものごとを教えてもらえる人たちのなかまいりをしたんだもの。それなのに、おまえさんは口かずが多すぎる。だから、おまえさんとおつきあいするのがいやなのさ。ほんとうですよ。おまえさんのためにを思っているのですよ。いやなことをいうようだが、それは、いい友だちはみんなそうしたものだよ。まあ、たまごをうむか、のどを鳴らし

たり、火花をたすことを、せいでして勉強するのだね。」

「私は、広い世界へでたいと思っっているのです。」

どうぞ、かってにおいでよ。」

そこで、あひるの子はでかけていった。そうして、およいだりもぐったりした。けれども、すがたがみつともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。

(四)

秋がきた。森の木の葉がこがね色や茶色になった。雲は、あられや雪で重くなってひくくたれていた。

ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときであった。草むらが

ら、大きなりっぱな鳥の一むれがやってきた。まぶしいほど
白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。それははくちよ
うであった。はくちようはみごとなはねを廣げ、この寒い國
からあたたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。高く
高きのぼっていった。あひるの子は、それをみて、ふしぎな
氣持になった。あひるの子は、水の上を車のようにくるくる
まわり、その首をはくちようの方へさしのべ、自分でもおど
ろくほどへんな大きな声をだした。あひるの子は、あの美し
い、しあわせなはくちようをわすれることができなかつた。
そうして、はくちようたちがみえなくなると、すぐ水のどん
どこまでもぐっていった。

あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとんでいったのかと
いうことも知らなかつた。しかし、いままでにだれをなつか
しく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。それは、う
らやましく思ったのではない。どうして、あの鳥のもってい
るような美しきをもつたらなどと望むことができよう。

そのうちに寒い冬がきた。あひるの子は、水のおもてがすっ
かりこおってしまったわないうに、水の中をおよぎまわらなけ
ればならなかつた。しかし、ひとばんごとに、そのおよぎま
わるあながだんだん小さくなっていった。あひるの子は、あ
ながこおってしまったわないうに、いつも足をつかっているけ
ればならなかつた。とうとうつかれはてて、こおりの中にと

じこめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。

あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかった。あひるの子をみつけて、木ぐつでこおりをくたき、うちへつれて帰った。すると、あひるの子は生き返った。子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、あひるの子はまたいじめられるかと思って、おそろしさのあまり、ぎゅうにゅうなべの中へとびこんだ。ぎゅうにゅうがへやの中に流れたので、おかみさんは手をたたいておこった。そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたるの中へとびおり、こんどはこなおけにはいってしまった。おかみさんは声をはりあげ、火ばしてあひるの子をうった。子どもたちは、あひるの子をつかまえようとして、ころ

げまわって、わらわたりさ
けんたりした。おりよく戸
があいていたので、あひる
の子は、雪の中の草むらへ
はいりこんだ。

そこで、つかれきって横
になっていた。

あひるの子が、きびしい
冬のあいだ、どんなに苦し
んだか、ここで話すにはあ
まりにもかわいそうである。



太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、ぬまの草むらの中で横になっていた。美しい春であった。すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。まえより強く空気をうち、とぶことができた。どうしてこんなになったのかわからないうちに、大きな庭の中にきていた。そこには、たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりのえだは、流れる水の上のびていた。ここは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。

ところが、木のしげみから、二三ばの美しいはくちょうがあらわれてきた。はくちょうは、つばさをサラサラと鳴らし、かるく水の上をおよいでいた。あひるの子は、そのみごとな鳥を知っていた。そうして、なんだかかなしい思いがこみあげてきた。

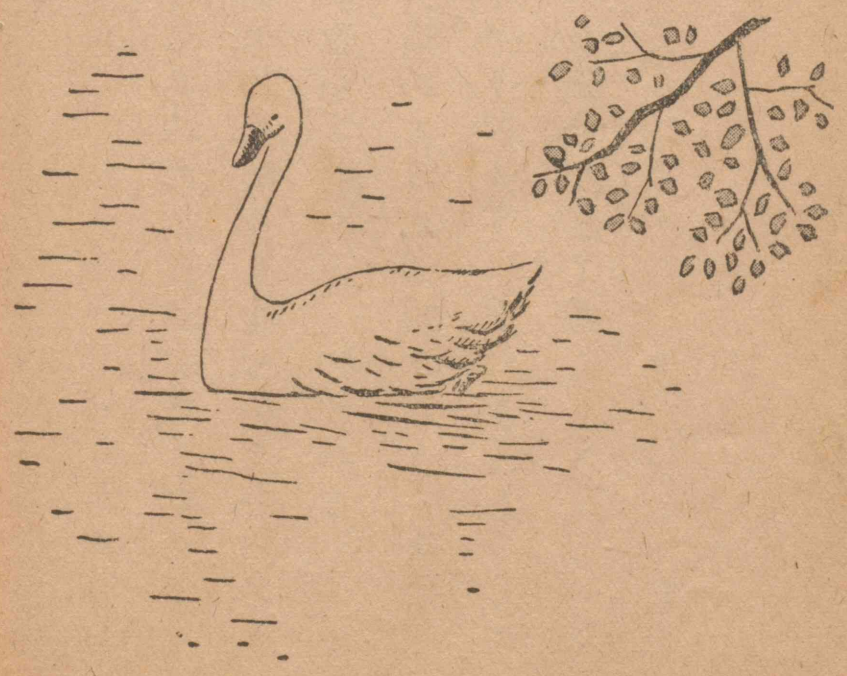
「私は、あのけだかい鳥のところへとんでいこう。私のようなみつともないものが、おくめんもなく近づいていくのだから、ころされるかもしれない。しかし、かまわない。なかまに追いかけられたり、にわどりにぶたれたり、女の子につきのけられたり、冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。」

そういって、水の中にとびこみ、はくちょうのほうへおよいでいった。

はくちょうはあひるの子をみた。そうして、はねをひろげ

てゆったりと近づいてきた。

「
かわいそうにあひるの子
は、ころされるものと思
ながら、水の上に頭をたれ
た。そのとたん、すみきつ
た水の上に自分のすがたの
うつっているのをみた。そ
れは、ぶかっこうなみっ
もないあひるの子ではなかつ
た。はくちょうであった。



うまれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小
屋にうまれてもさしつかえはない。はくちょうは、その受け
てきたまずしさとふしあわせとをかえて喜んで。いまは、
その身をとりまくりっぱなもののの中に、しみじみと幸福をさ
とったのである。

大きなはくちょうたちは、そばへおよいできて、くちばし
でかるくなでてくれた。

小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。いち
ばん小さな子どもが、

「あすこに新しいのがいるよ。」
とさげんだ。すると、ほかの子どもたちも、

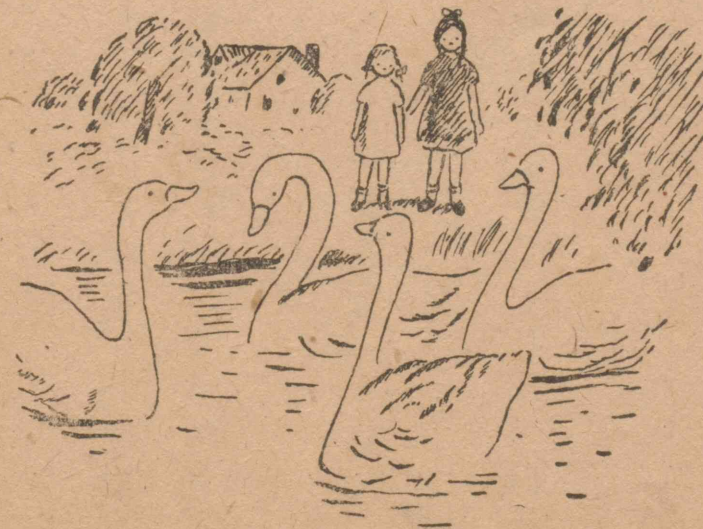
「そうだ。新しいのがきた、きた。」
と喜んだ。子どもたちは、手を
たたいておどりまわった。おか
あさんのところへ走って行って、
もらってきたパンやおかしをな
げてよこした。みんなは、

「新しいのが、いちばんきれい
だ。」

というど、年をとったはくちよ
うが、新しいはくちよのまえ

にきて頭をさげた。新しいはくちよは、すっかりはにかん
でしまった。どうしていいのかわからないので、つばさの中
に頭をかくした。ほんとうに幸福であったが、すこしもいば
らなかった。そのむかし、いじめられたり、あざけられたり
したときのことを考えた。それが、いまでは、すべての鳥の
中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。
にわとこの木でさえ、新しいはくちよのまえにえだをたれ
た。太陽はあたたかく、おだやかにてらした。すると、つば
さがサラサラと音をたてた。わかいはくちよは、そのほそ
長い首をあげて、心のそこから喜ばしそうにさげんだ。

「私がまだみにくいあひるの子であったとき、こんな幸福が
あろうなどは、ゆめにも思わなかった。」



七 いねを育てて

4月27日 (金) 晴 19度



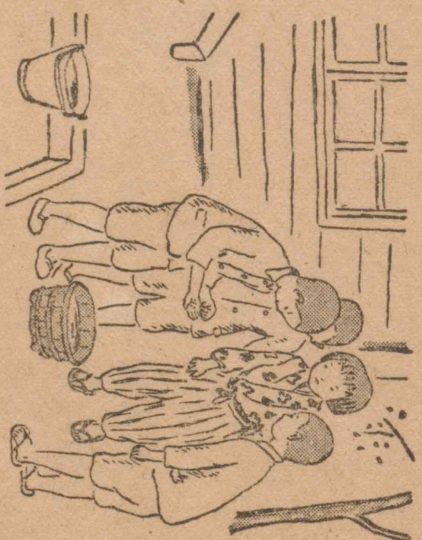
きょうは、種もみひたしをしました。品種は、あじのよい「農林1ごう」というのだそうです。

やゝ3.6dlのもみを、水の中にひたしました。ういたもみがあつたので、手ですくってみますと、かるいもみともみからばかりでした。

水をいっぱい入れ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるといふことですよ。

5月2日 (水) 晴 20度

水をとりかえるときにみたらもみのもとのほうがすこしふくらんでいました。



5月5日 (土) 雨 15度

もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。これが、ほんとうにめになるのでしようか。

5月7日 (月) 晴 18度

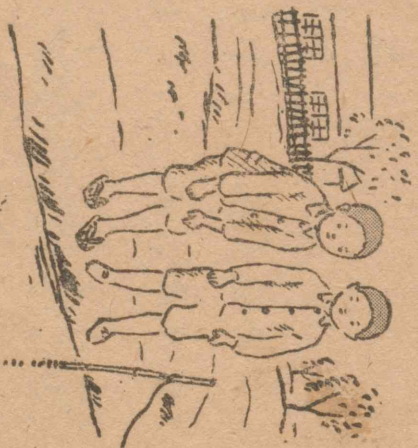
きょうは、お天気がいいので、もみまきをしました。種もみひたしをしてから、ちょうど10日めでした。はんごどになわしろをきめ、そのさかひにしるしをつけました。土をあまり深くはると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。水のすむのをまっけて、むらのないようにまきました。ひたさないう種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。いつ、めがてるでしょう。

5月15日 (火) 晴 20度

種もみから黄みどりのめがてました。ひたさないうは、まだめがてません。

5月21日 (月) くもり 18度

もう、なえが、にのびました。ひからも、やっどめ水にひたしたほうでました。



2cm から 3cm
たさないう種もみがでてきました。が、1週間早く

6月13日

なえが朝風にゆりましました。黄みど

(水) 晴 27度
られるようになり
の新しいなえ

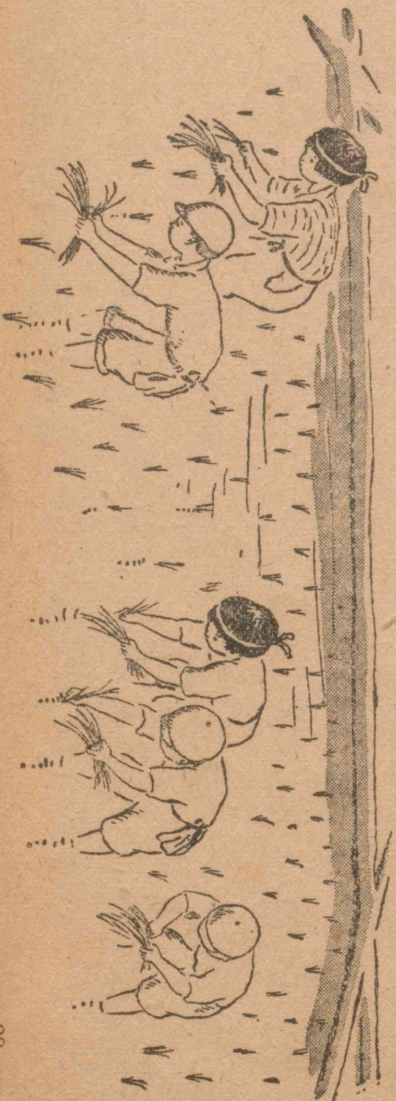
が、だんだん育っていきまます。どこの田も、たんざくがたに
でそろってにきやかです。

6月15日 (金) くもり 24度

田植えのころになったので、しろかきをしました。いねが
よく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりを
くだいてこまかくしました。種まきのときとちがって、こん
どは深くたがやしました。

6月27日 (水) 晴 28度

いよいよよきようは田植えてしたので、みんなうれしそうで
した。よいお天気で、風もなく暑い日でした。なわしろから
とったなえをみんなでわけました。あいだを30cmぐらはずつ
あけて、きそく正しく植えました。1かぶに3本ずつ植えた
のと、1本ずつ植えたのと二とおりにして、くきの数のふえ
るようすをみることにしました。やく12平方mに150かぶばか
り植えました。これから、水がきれないようには気をつけましょ
う。



7月12日 (木) 晴 28度

どのなえからも すこしずつ新しいなえがでてきました。
これで、もうだいじょうぶでしょう。

7月13日 (金) 晴 28度

1本のなえのまん中からでてた新しい葉が、5cmぐらゐにな
りました。どのなえも生き生きとしています。根が横へはる
ので、廣いところのほうが育ちがよいと思いました。

7月18日 (水) 晴 29度

葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんでてきました。

新しい葉は、まるまってでてきます。ずつと日でありがっつゐ
たので、水をやるとうれしそうです。

8月7日 (火) くもり 25度

みんなて植えたなえが、いきおひよく育っ
ていきます。5かぶをのこして、ほとんど
85cmになりました。1本ずつ植えたなえが



だいたいは7本ぐらゐにふえました。3本ずつ植えたのは、9
本ぐらゐにふえましたが、いちばん多いので15本になりまし
た。

8月18日 (土) くもりのち雨 25度

いねのほのさきがふくらんで、いまにもほがでそうです。

8月22日 (水) 晴 28度

いねのほがではじめました。葉のついているもとのところから、黄みどりのほがでました。田植えをした日から、ちようど57日めです。

9月1日 (土) くもり 25度

ほがでそろいました。ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のようなものがたくさんはえていました。花のさいているほもみつけました。やくは、白くてにおいもなく目だちません。

9月4日 (火) 晴 29度

朝、花のようすをみにいきましたら、まださいていませんでした。3時間めの終りに開きはじめましたが、お晝の時間には、もうとじてしまっていました。花のさくのは、1日にすこしのあいだだけだと思いました。—

9月7日 (金) 雨 26度

きょうは雨ふりでした。花は、1日開きませんでした。

9月14日 (金) くもり 26度

いねの花のすんだあとをさわってみると、いままでペシヤンこだったさきが、ふくれてかたくなっていました。二つにわってみたら、中に、青いものがまるくふくらんでいました。これが、きっと実になるのでしょう。

9月21日 (金) 晴 27度

いねの害虫——いなごが
6びきほえました。葉の
うらに、青黒いなにかのた
まごが生みつけられていま
した。先生におききしま



と うんかのたまごだということでした。みんなで虫とりを
しました。いねは、だんだん黄色くなっています。

9月29日 (土) くもりのち雨 23度

病気でせいのびないいねが、5かぶありました。先生に
おききたら、このいねは、いもち病という病氣にかかった
のだとおっしゃいました。

10月20日 (土) 晴 22度

どのいねのほも、すっかり黄色になっっておじぎをしていま
す。1かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本

もありました。こんどは1かぶのほの数をみんなてしらべて
みました。1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついてい
ました。3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので16、ほか
のは、だいたいい12ぐらいでした。両方をくらべてみて、あま
りちがわなことがわかりました。

もみの数をしらべてみました。1本のほに、多いのは180
ぐらいずつついていました。ですから、1つぶの種もみから
やく1500つぶもみかできたわけです。

10月25日 (木) 晴 23度

いねかりをしました。いねを根もとからかりとりました。

じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあたるようにきちん
どかけました。



11月10日 (土) 晴 19度

いねこきをしました。いねこきかいはつかわずに、手で

いねこきをした人もいました。ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。こんどは、もみとごみをわけました。風のくる場所で、目の高さぐらいいのどころからごみをふきとばさせます。もみをむしるの上にひろげてほしました。

11月15日 (木) 晴 17度

天気の良い日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。きょうはもみすりをしました。きかいがないのでくふうしました。いたどいたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすってもみがらをはじきました。きれいなお米がでてきました。

11月19日 (月) 晴のちくもり 18度

のこっていたもみを、1日、日光にかんかんほして、すくにもみすりをしてみました。どんどんすっていたら、こんどはすくにはげましたが、くだけた米もでてきました。ほしてすく、もみすりをするものではないと思いました。

やく12平方mの土地で、4lのげん米がとれました。平年作は、1平方mに3.5dlのげん米がとれるのですから、これは平年作とゆうことになります。

國語 第四学年中
 Approved by Ministry of Education
 (Date May. 17, 1949)

昭和二十二年七月二十日翻刻發行
 昭和二十三年四月二十五日修正翻刻發行
 昭和二十四年六月一日修正翻刻印刷
 昭和二十四年六月二十五日修正翻刻發行
 (昭和二十四年五月十七日 文部省検査済)

著作權所有 文 部 省
 翻刻發行 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社
 代表者 長 得 一
 印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社堀船工場
 發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社

定價金拾八圓六拾錢

種 (94)	停 (58)	算 (34)	馬 (26)	福 (7)	者 (4)
植 (98)	少 (61)	太 (34)	万 (33)	予 (7)	洋 (4)
数 (99)	姉 (71)	陽 (34)	單 (33)	言 (7)	賣 (5)
開 (103)	重 (83)	滿 (38)	位 (33)	血 (11)	指 (5)
害 (104)	農 (86)	着 (40)	速 (34)	信 (12)	買 (6)
	夫 (86)	横 (49)	秒 (34)	皮 (14)	族 (6)
	育 (94)	寺 (58)	球 (34)	表 (20)	幸 (7)

